

「歌人の人生に思いを馳せよう」

『永井陽子全集』青幻舎2005/7/25刊 による

年	年齢	できごと
1951	16	4月瀬戸市に生まれる
1967	19	県立瀬戸高校入学
1970	19	県立瀬戸高校卒業
1972	21	短歌新人賞受賞 3月短大卒業
1973	22	5月父死去
1974	23	4月県立芸術大学音楽学部勤務
1975	24	10月東洋大学国文学科編入学
1978	27	『なよだけ拾遺』刊 司書資格取得
1980	29	第4回現代歌人集会賞受賞 9月東洋大学卒業
1981	30	4月県立図書館勤務
1983	32	現代歌人協会会員 『樟の木のうた』刊
1986	35	『ふしぎな楽器』刊
1989	38	4月県立女子短大非常勤講師
1991	40	4月県立大学外国語学部勤務
1993	42	1月母死去
1994	43	5月名古屋市長東区高社へ転居 『モーツァルトの電話帳』刊
1995	44	4月愛知芸術文化センター勤務 4月愛知文教女子短大助教授 『てまり唄』刊
1999	48	10月名古屋市長東区榎木町へ転居 第6回河野愛子賞受賞
2000	48	2月3月入院 10月から休職 1月26日死去
※48		『小さなヴァイオリンが欲しく て』刊

例 5

連翹は、黄色という、赤やピンクのような華やかな

い、どちらかといえば地味な花であり、かつ花の一つ

が小さいが、そんなものをたっぴと残してゆく母の人

生一存在感はないかもしれないが、しかし確実に季節を連

れてくる一に、深く思いを寄せている様子がうかがえる。

窓辺から入り込む春の気配と、死にゆく母を対照させ、さ

びしいはずなのに悲しさを感じさせない、からっとした空

気さえ漂うようである。



クスノキは「名古屋市の木」です。昭和47年8月、7

種類の候補木の中から市民による人気投票の結果を参考

に、クスノキが「市の木」に選ばれました。

選定の理由は、市民投票の第1位であること、常緑樹で

成長が早いこと、風土になじみ深く、テレビ塔周辺、熱田

神宮、名古屋城など市内各所に巨木があり、市民に親しま

れていること、名古屋の都市景観にふさわしく、今後の緑

化推進に役立つことなどです。



『小さなヴァイオリンが欲しくて』2000（平成12）年刊 より

花吹雪

1993（平成5）年

運作的なイトル

1 誰か来る誰かたしかにこの家へ来るぞと夜の笛吹きケトル

2 花ぶぶく地上といへどただひとラズドサットがうつした光

3 コンペイトウのツノはなぜある夢の中の若駒に角なせある今宵

4 ガスベルの三十階の机上までさくらひとひらたれが運び来

5 窓の辺に連翹といふはるのはなひとつ咲かせて母逝かむとす

便宜的な番号です

ツバメ

6 曇り日を回送されてくる手紙受け取ればつややかなツバメよ

7 移り来て酒屋のつぎにおぼえたる高社郵便局の近道

高社：名東区高社（地下鉄一社駅付近）

8 幸ひにめぐりあふ日も近からむ今日はなみづき花を付けたり

9 休日のピルの間を抜けひるがる一羽のツバメひかりのツバメ

10 この街の毛虫はみんない顔をしてゐるなどと言ひつづ潰す

11 自転車は陽のしましまを渡りけり街路樹のかげさやかに揺れて

12 ヴァイオリンとヴァイオラのための協奏曲風たちが奏づる上水無月

13 消息はツバメに聞けと記してより転居通知も出さず過ぎにき

1992（平成6）年

青空

14 職場など燃えてしまへと噴ひつづある夜は見たり空飛ぶクジラ

15 治郎兵衛のイチキのうへにひろこれるおほきな傘のやうな青空

16 井のなかのかはづいづびき夢ばかり見てゐる蛙すきとほりゆく

17 血縁といふはひとりもなし 街は樹海のやうにしづかに暮れて

18 青空を舞ひ落ちてくるいちまいの銀杏のごとき記憶も消えよ

19 閉ざされておのがころのあづき色くつくつと煮る冬のいちにち

20 縄文の人らはどんな言葉にて語りしやこの空のあをさを

1991（平成7）年

樟の木とわたし

21 今はもうかの樟のみが記憶する喪服のわたし二十歳のわたし

22 葬列は樟の葉かげの域を出でこの世ならざる方へと進む

23 むかう側にはれんげ畑がひろくと死にゆく母に言ひたる嘘も

24 父には父の母には母の子守唄ありしよ杜の樟のみが知る

25 あとひと目この世にどどめ置く父の柩へながれきたる樟の香

26 高齢といへどたしかに人ひとり葬りてのちを樟の木に寄る

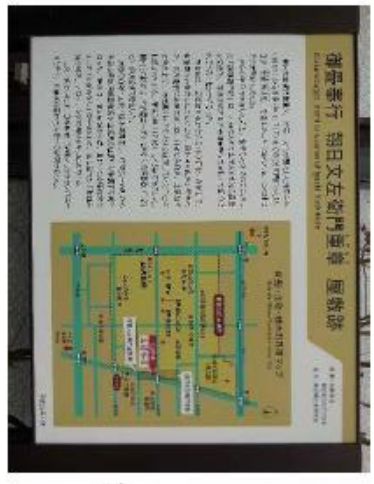
1990（平成8）年

樟木町界限

27 樟の木が道路の内に生えてゐるあそこと言へばみんな頷き

28 樟木町の猫どもはどれも丸顔でふさふさでミヤオミヤオと従きくる

29 御景奉行朝日文左衛門宅も元祿のこの界限にあり



御景奉行 朝日文左衛門重章 屋敷跡

平成25年、11月「東区町育での会」により主税町交差点

南西の敷地内に「朝日文左衛門宅跡」の標札が設置されま

した。春にはオオカサクラの咲く並木道で、すぐ南には

「文化のみち二葉館」があります。朝日文左衛門の屋敷は

この道の上にあつたように古地図に書かれています。

30 都会には都会のしげきが満ちて父母のたましひ遊びに来たる
31 青空へ樟の新芽が吹き上ぐるころにぞ出さむ転居通知は

197 (平成9)年
ボナールを見ましたか

32 拜啓 あなたはこの春ボナールを見ましたか 病棟に書くはがき一枚

33 さびしさはみづかねいろの雲となりながれてゆきぬこの世のほかへ

34 ゆふぐれはサボテンと化すころかな夕陽にトガが突き刺さりある

35 明日はもう踏み出したくなし泥にまみれた雨の靴を脱ぐとき

36 あの世にて母が洗濯機をまはす音きこゆるよひとりペンダに立てば

37 くつしたの形でぶくろの形みな洗はれてなほ人間くさし

38 まあくんと材木置場であそぶゆめ見たりみみなしうさきもあたり

39 割り算のあまりのやうな時間さへをしむころのその果ての果て

40 冠のごとかがやく夏の雲高しがんぼることをやめたる朝に

41 ひつそりと見上ぐるそしてしたしかむるこの夏初の入道雲を

42 うつるる刻もいつしか忘れたり点滴はいま夕陽のしづく

43 これのみは最期の手紙に貼らむるはしき切手を残しておく膏

44 おねがひひとつ短冊に書きわかれは死にたし七夕のうた歌ひながらに

45 こころを雲のごとく保てと言ふ時の横顔はまだ青年のかほ

46 さよならといつかひつそり告ぐる日が来るんでせうね 樟の木に言ふ

47 ポケットにあるみづいろの錠剤をなぐさめとなす海の記念日

48 人生の版面凸凹なる版画刷り出だすべからず詩歌には

49 少しづつ日暮れが早くなることをさびしくおもひスーパ―を出づ

50 銀色のすすきの穂波かきわけてゆくゆめ 人を呼ぶこゑはする

51 長月の暦のかはる日におもふつくづくながき労働のこと

198 (平成10)年

霧

52 この世には呼ぶ者もなし杉木立あらぬ方へと霧がながる

53 書物ばかり捨つる可燃ゴミ収集日「さらば」と言へる婆娑羅のころ

54 ゆめのなには霧がながれてゐたるかな夢よりもなほ遠くへゆきだし

55 たんぼほの綿毛のやうなたましひをもてあまして春過ぎてなほ

56 わたくしが居なくなりてもこの部屋にしづかに月日はながれつつけよ

57 錠剤を見つむる日暮れ ひろこれる湖よこの世にあらぬみづうみ

58 人間はギョギョ働いてふと消えてゆく霧のむかうへ

59 一年たつても二年たつてもかへらねば昔話になるのでせうね

60 卓上に飾る たとへば明日死ぬにしても 小さなマリゴールド

61 月の夜にいづこへ寝ちてゆかむとすたんぼほいろのたましひひとつ

199 (平成11)年

日常へ帰る

62 日常を出でゆくわたくし 日常へ帰るわたくし どしやぶりの街

婆娑羅：(室町時代の流行語)

①遠慮なく振る舞う・乱暴

②派手に飾り立てて威張る

ボナール：フランスの画家
明るく多彩な色彩で風景な
どを描く。

- 63 こんな時古代人は何を食べたかと思ふ病院の日暮れは
 64 耳を切られたうさぎのことやいちめん咲くれんげ草おもふ病室
 65 療養のをはりとなりぬ店頭に新たまねきの並ぶ季節が
 66 少しづつ買ひととのへる調味料ふたび生きてゆくため 春を
 67 日常へかへるころがとらへたる城のま上のゆふあかねぐも
 68 春光をたつぷり浴びるぬれ羽色 榎木町のカラスはおほらかなカラス
 69 パンピチンツンペテンのその次は…雨が降り出し授業を終へる
 うさぎのひとりごと〈遺稿〉
- 70 丈たかき汝ぞ見たれば青年にかばはれし目を思ひ出したり
 71 人はたれもこの世に生まれて名前とふさびしきものをまつ与へられる
 72 絵の中のミツクを見てふと話しかけてゐる土曜日ひるすぎ
 73 一滴の涙も見せず在りしかな父が死んだ日母が死んだ日
 74 マンションに人の声せぬゆふぐれがたはからうじて保つ自分を
 75 死ぬ前にいまひとたひをかぎりなく美しきもの見たしと思ふ
 76 何もない誰もぬないどくりかへす風強き日のできごとでした
 77 ささやかに生きたあかしの歌一首弥生の街に残さむとする
 78 三月の晴れの確率カレンダ―見てゐるどの日も仕事なれども
 79 かなしみの一輪の梅咲きにけりよるこびといふものにはとほく
 80 流れたる歳月にしていつまでも美しからずわが言葉さへ